

大学連携シンポジウム

デジタルアーカイブで、街を語る主体を取りもどす

中村 雅子（東京都市大学）

1. 横浜のもう一つの顔

本誌の読者の方々は横浜にどんなイメージをお持ちでしょうか。「中華街や元町などの繁華街を擁する異国情緒漂うおしゃれな街」だろうか。ここではもう一つの重要な顔として、市の北部に位置し、全国有数の面積を有する港北ニュータウンをご紹介したい(写真1)。



写真1：港北ニュータウンの景観（2013年10月15日 筆者撮影）
直線的で広い車道、埋設式で電柱がない街路、背後に見える大きな公園（緑地）、整然とした高層マンションといった要素がニュータウンらしい景観を特徴づけている。

筆者の勤務する東京都市大学横浜キャンパスは、その港北ニュータウンの中に位置している（横浜市都筑区）。そのため横浜市や都筑区の住民と協働で地域の課題に取り組む機会を頂くことも多い。

「ニュータウン」といえば、高度経済成長期の都市の過密化や人口増加に伴う乱開発への対策から、全国的には1950年代から80年代にかけて、郊外に都市計画に基づく大規模な開発が行われた街である。港北ニュータウンのほか、千里、多摩、高蔵寺ニュータウンなどが全国的に知られている。住みやすい街というイメージの一方で、ニュータウンは画一的で個性や歴史のない街、商品化されたコミュニティがない街として批判の対象にもなってきた（若林、2007；三浦、2004）。

しかし港北ニュータウンの地元住民からは、これらのステレ

オタイプ化された街のイメージに対して、異議を唱える声が多い。また、実際に地域住民の方々と付き合いが深まると、港北ニュータウンが個性がないどころか、独特の歴史や特色を持つ街として見えてくる。例えば開発プロセスの独自性があげられる。1965年に横浜市の事業として発表されてから最後の造成が完了する1996年まで30年以上の時間がかかっている。また住民参加型の手法で時間を掛けた交渉を行った結果、住民の意見が数多く取り入れられ、全国でも初めて大規模な申出換地⁽¹⁾が行われるなど、その後の大規模開発のモデルとなった。農業専用地区も計画的に温存した。それもある、古くからの住民が中心となって、横浜の他の地区ではほとんど見られなくなった虫送りのような年中行事も継承されている。その担い手は必ずしも開発前からの住民（旧住民）だけではなく、開発後に転入してきた新住民の見物や参加も盛んである。写真2のように神社を出発した虫送りの松明行列に新住民の子どもたちやその若い親たちが多数加わり、高層マンションの立ち並ぶ住宅地を夕暮れ時に練り歩く光景は、一瞬、異次元に迷い込んだようである。



写真2：山田神社の虫送りの行列（2012年7月21日 筆者撮影）

開発プロセスに関わった人々が中心となって、このような街の記録を残し、今後の街づくりに活かしていこうという「港北ニュータウン記念協会」や、すでに9割を占める開発後の新

住民の方々が多数参加する活動(「つづきをガイドする会」や「つづき交流ステーション」など)も活発に行われている。筆者の研究室でもこのような街づくり活動に関わる人々のアーカイブ活動のためのネットワーク「つづきアーカイブクラブ」のメンバーとなって(写真3)、情報共有のためのサイト「つづき『街の記憶』プロジェクト」を協働で構築することに着手し始めたところである。



写真3: つづきアーカイブクラブの公開ワークショップの様子
(2012年8月30日 中村研究室撮影)

2. 「街の記憶」は実践によって生み出される

さて長くなってしまったが、港北ニュータウンに限らず、街の歴史が住民によって生み出され、編集されていく様子を多摩ニュータウンの事例などにも見ることができる。ここで考えたいのは、港北ニュータウンは「ニュータウンだが、例外的に個性的」なのではなく、どの街にも「この街を特別にするための実践」がありうるということ、そして、そのような実践にアーカイブが深く関わっているのではないかという見方である。

セルトー(1980=1987)によれば、空間とは「実践された場所」のことである(邦訳、p.243)。「街」という空間も、そこに共有される「街の記憶」も、そこで生きる人々の実践と結びついて初めて生まれ、実践にともなって変化するものと捉えることができる(中村、2011)。そうであれば「街の記憶」はその実践のコミュニティ(レイブ&ウェンガー、1991=1993)と切り離すことはできない。異なる実践に携わる立場からは、異なる街が立ち現れてくることも、そのように考えれば了解可能である。実践が変わっていけば「街の記憶」も揺れ動く。

地域イメージや地域をめぐる共同体意識は、近代以降、マ

スメディアと深く結びついてきた(Anderson,2006 = 2007)。またマスメディアに限らず、地域イメージがメディアや地域内外のコミュニケーションに従って形成されていく(丸山・国領・公文編、2006:田中、1997など)。ここでは、中でも市民がデジタル・テクノロジーと出会い、映像アーカイブというメディアと取り組む意味について考える。

3. アーカイブの市民化

図書館や学校、行政などが保有する郷土資料は「街の記憶」の生成や維持に大きな役割を果たしている。このような公的主体による地域資料の収集は、提供者である地域住民の協力なしには成り立たない。その意味で多かれ少なかれ、地域アーカイブ作りには市民が参加して行われるのだが、市民による地域独自の記録の掘り起こしや収集についても、インターネットやデジタル化以前から、多くの地域で郷土史家、研究会などの人々によって営まれてきた。しかしその活動は往々にして広がりを持たず、同好の士の間に関じる傾向にあった。

一方、デジタル化で活性化した市民アーカイブ活動は、従来の草の根の活動とかなり性格が異なっている。必ずしも歴史やアーカイブの専門家によるものではなく、むしろインターネット技術が起点となっていることが特徴である。先駆的な事例として地域資料デジタル化研究会(山梨県)の「甲斐の庫」(1999年から活動開始)が挙げられる。この種の活動の担い手の多くは、もともとインターネットなどのメディア技術に関心が高く、新しい技術を街づくりや地域活性化に生かせないか、という問題意識からさまざまな活動に取り組み、その一つの展開として、デジタルアーカイブに注目した人々である。市民参加で地域情報を収集し、地域文化を再発見し、街の記憶として共有していくというデジタルアーカイブの活動は、彼らが目指す「情報化に支えられたコミュニティ」という目標にも合致していた。

このように紹介すると、インターネットに限定された情報発信をイメージするかもしれないが、実際にこのようなタイプのデジタルアーカイブ活動で行われている実践は対面的なコミュニケーションをはじめとするさまざまな要素を含んでいる。そうでなければ成り立たないことが活動の中で明らかになっていくのである。

例えば市民デジタルアーカイブの代表的な事例である「みんなで作る横濱写真アルバム(以下、横濱写真アルバム)」(画像1)では、オンライン投稿だけでなく、スタッフが多くの市内企業や個人に働きかけて写真を提供してもらったり、市内各地で日を決めてイベントを開催し、人々に写真を持ち寄ってもらい、その場でスキャンやアップロードを手伝ったりといった方法で収集を進めた。このようにユーザとの信頼関係や社会的なネットワーク構築と、映像アーカイブを収集、蓄積、公開することが表裏一体の関係で進んでいったのである(中村、2013)。

このようにして集まった写真のかなりの割合は、いわば素人写真であり、テーマ性や、芸術性、希少性に欠けるかもしれない。しかしこれらの写真は、市民一人ひとりが、何を「街の記憶」として残し、共有すべきかという評価を専門家に委ねるのではなく、自分で判断して集まってきたものである。市民が自ら語り、価値を見出す主体となるところに独自の意義があると考えられる。投稿コメントや投稿者の自己紹介を読み解いていくと、そ

の価値付けにも多様性がある。ある人は失われていく昔の風景を両親の残したアルバムから選んで投稿し、ある人は昨日のイベントの写真を「10年たてばアーカイブになる」と、未来のアーカイブと位置づけて投稿する。今はない建物や、昔の流行、服装などの風俗、事件などにそれぞれ焦点をあてて語る人もいる。

映像アーカイブのデジタル化が契機となって、人々のアーカイブ活動へのアクセスを広げ、街の記憶を語る主体となる市民を増やしている。このようなアーカイブのあり方を、ここではトップダウンの公的アーカイブにはない「語る主体を生み出すアーカイブ」と呼びたい。

語ることで生み出された主体は、ときには次のアクションへと動いていく。インターネットを媒介とした市民発のアーカイブ活動の多くは、公的なアーカイブと異なり、それ自体を目的として留まるのではなく、目的をシフトして他の街づくりなどの活動に発展したり、あるいは逆に放送局(例:調布市市民放送局)や地域情報ポータルサイト(例:横浜市青葉区ポータルサイト「あおばみん」)などから発展したりする形で連動していることが多

い。アーカイブ活動自体も生きて動いているのである。



画像1:横濱写真アルバムサイトの一面面(池辺町杉山神社例大祭)

出典 URL: <http://www.yokohama-album.jp/picture/detail/9612/> (中心の写真は筆者が投稿したもの)

【註】

1. 申出換地 港北ニュータウン開発では地権者に移動先の案を提示した上で、希望する場所への換地を行う「申出換地」が初めて本格的に採用された。従来はこの方法では大規模な開発は進まないと言われていたが、実際には駅前予定地へと代替地を希望するようなケースでは、最大8割近い減歩（面積の減少）が行われたにも関わらず、結果的に多くの地権者の協力が得られた。

【引用文献】

- Benedict Anderson (2007) *Imagined communities : reflections on the origin and spread of nationalism.* Verso : ベネディクト・アンダーソン (2007) 『定本想像の共同体 : ナショナリズムの起源と流行 (社会科学の冒険 2-4)』白石隆・白石さや (訳), 書籍工房早山 (原著改訂増補版)
- Michel de Certeau (1980) *L'invention du quotidien.1 Arts de faire.* Collection "Polylogos" : ミッシェル・ド・セルター (1987) 『日常実践のポイエティック』山田登世子 (訳), 国文社
- Jean Lave, & Etienne Wenger (1991) *Situated learning : legitimate peripheral participation.* Cambridge University Press : ジーン・レイヴ & エティエンヌ・ウェンガー (1993) 『状況に埋め込まれた学習 : 正統的周辺参加』佐伯胖訳 産業図書
- 丸田一、国領二郎、公文俊平編 (2006) 『地域情報化地域情報化 認識と設計』NTT 出版
- 三浦展 (2004) 『ファスト風土化する日本 : 郊外化とその病理』洋泉社新書 y
- 中村雅子 (2011) 「ハイブリッドな社会的空間としての『まち』」東京都市大学環境情報学部紀要第 13 号 16-22
- 中村雅子 (2013) 「地域デジタルアーカイブにおける「写真」の意味」日本質的心理学会第 10 回大会 ポスター発表抄録集 p.101
- 田中美子 (1997) 『地域のイメージ・ダイナミクス』技報堂出版
- 若林幹夫 (2007) 『郊外の社会学 : 現代を生きる形』ちくま新書

【写真家紹介】

中俣正義 (1918 ~ 1985)

南魚沼市欠之上の生まれ。1947年12月に、日本交通公社の写真家嘱託などになったあと、1950年4月から正式に新潟県観光課に勤務。それより、県の観光映画を製作するとともに、写真家として活躍する。

小林新一 (1917 ~ 2012)

1950年より運輸省第一港建設部新潟港湾工事事務所に勤務するかたわら、アマチュア写真家として活躍。1952年には中俣正義らと新潟写真作家集団を結成する。1959年『中央公論』3月号に「沈む大地——失われ行く新潟」掲載を機に、プロとなる。

角田勝之助 (1928 ~)

現福島県大沼郡金山町生まれ。1951年にカメラを入手、金山町の住人を撮影し始める。以来、現在までの60年以上にわたり村人を撮りつづけ、金山町の私的写真アーカイブとも呼ぶべきアルバム作りを手がけてきた。

内野雅文 (1973 ~ 2008)

東京生まれ。1996年東京造形大学写真コースを卒業後、写真家として活動を始める。「ケータイ 1996 ~ 2004」、「車窓から」などで注目される。2004年京都に住まいを移し、2008年1月1日京都八坂神社境内で撮影中に心筋梗塞で倒れ死去。

表紙・裏表紙写真：中俣正義

にいがた

地域映像アーカイブ

第4号

2013年11月 発行

ISSN 1883-5643

編集 地域映像アーカイブセンター

発行 新潟大学人文学部

問い合わせ先 〒950-2181

新潟県新潟市西区五十嵐2の町8050番地
新潟大学人文学部内

URL <http://www.human.niigata-u.ac.jp/ciap/>

E-mail cria@human.niigata-u.ac.jp

印刷 有限会社 兄弟堂印刷所